

Title	平将門論, 荒井庸夫著
Sub Title	
Author	今宮, 新(Imamiya, Shin)
Publisher	三田史学会
Publication year	1924
Jtitle	史学 Vol.3, No.2 (1924. 8) ,p.170(331)- 172(333)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19240800-0170

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

地の諸豪族が我が皇室に服従したる四世紀以後の事を見ゆれどもヒムカ降臨の話の存せるはマソ平定の五世紀なりを示すが如し。されども支那文化の色彩強く現れたるは、同文化渡來が五世紀の中期なりを以て、是が彩用に又時の経過無しとせず。従つて其最初の述作は六世紀に入りて外交問題紛糾の際、皇室起原強張の爲發生せるを示す。以上迂餘婉々其内容を説くに慌しく、反つて著者の見解を誤察したるを深く恥づるは、著者精神の一邊だに觸るゝものあらば幸ひます。思ふに從來古典に行はれたる考證學的研究或は突飛なる比較研究に不満を抱きし讀者は此書を見るに至り、初めて神代史の如何にして生れ來りしかを如實に或光明を與へらるゝものと信ず。實に此著は近來勃興續出せる神代史の研究に對して頭角を抜き、新しき鞏固なる或位置を占むるに至るものあるを疑はざるなり。然れども要するに其研究は研究に留るのみにして、今直ちに固定説としての賛意は表し難し。そ

は神代史の研究には史料無く、唯現實と想像、幻影と如實等の錯綜より生ぜざる記録、然も編纂當時の舊辭帝紀の採用範圍を考慮に入る、時、此疑は許さるべきものあらんか。(大正十三、五、十四、脱稿會根研三)

平將門論(荒井庸夫著) 大同館發行

明治になつて以來總ての方面の進歩と共に史學界にも一大進歩を來し幾多の諸問題は新しき見方に依て其の眞想を論議せらるゝに至つた、將門の問題も其の一である。田口博士が史海に於て先

づ第一の烽火を上げられ、次で織田完之氏も將門の冤を注ぐことに全力をつくされた、斯くて將門の眞想も段々明白になり小學校の國史よりも將門叛亂の事蹟は削除せらるゝ程になつた、而して荒井氏の平將門論は更により充分なる理解を我々に與ふるものである、氏は其の銳利なる推理力と平易なる文章を以て餘す所なく將門の心理と行爲とを解剖し叙述されてゐる。

氏は先づ將門は何處の人であるかとの問題に對して將門記及び日本紀略の記事に依り將門の本據を下總國豐田郡と斷定し相馬傳説の謬妄を各方面より十分に立證し、つゞいて非常に變遷の多かつた利根川流域の此地方の地形が當時は如何に現今と異つてゐたかを述べ將門一族の住所を決定し、又今まで解決するこの出来なかつた偽宮の位置については將門記に「下總國之亭南」とあるがその抄本(彰考館所藏寫本)には「下總國亭南」とあつて之字がなく又將門記の他の一箇所に明に之字を誤寫した例があるからこれは下總國亭の南の誤であらうとなし、すれば將門の偽宮の位置は現今の結城郡岡田村國生の南の方であつたらうとされてゐる、又當時東國の豪族は牧場と深い關係があつたが將門もやはり大なる牧場を管理してゐたのであつて現今の岡田村古間木や安靜村大間木は古牧、大牧の轉訛であることは疑ひないことされ、次で眞の將門の墓は現今岡田村の南端にある「ミヨノメ」と呼ばるゝ一廓であること斷定されてゐる、聞く所に依る氏は茨城縣立水海道中學校長の職にあると言ふ従つて此等の研究は氏自ら度々實地踏査を爲された結果であるからして、その正鵠なる點に於ては先

に出でたる織田完之氏の誤謬を十分に正したるものであつて我々の深く注意すべき所である、次に氏は將門を理解せんとするには其時代の趨勢と場所とを了解しなければならぬと承平天慶の頃の趨勢即ち大化改新の公民地主義が破壊されて莊園が成立し、出擧の弊害等に依て貧富の懸隔が甚だしくなつた事情及び文化の普及者として又莊園の所有者として武人は此等莊園制度の必然の結果として社會に現れ其の中堅を占めたものであることを述べ、更に將門を生んだ坂東八州に就ては、それが我國史上特殊の働を爲す理由は主としてその地形と位置に依るのであるが尙重大なる原因は民族競争に依る慍悍なる氣質に負ふ所が多いこととし關東武人と牧場との關係を述べ進んで將門亂後の武士勃興の階段を一瞥し「歴史の歩調には飛躍も無ければ停止もない地方地主の發生から武家政治の確立まで五百餘年、其中間に平將門の現れた事には其處に重大なる意義がなければならぬ」と結んでゐる、以上は第一編の内容である、これまで多く將門研究は公にされたが氏の如く將門を生んだ時代と場所に注意されたのは始めてであつて是は是非とも必要なことであると思はれる。

第二編第三編は主として將門の研究であつて先づ始に叡山謀議説や檢非違使問題の如き普通に信ぜられてゐる俗説の信するに足りないことを述べ次に將門と攝關家の關係を研究されて藤平二氏の間は本家領家の關係にあつたらしいとされてゐる、これは氏獨特の研究であつて我々の非常に注意すべき點である。將門と國香良兼等の争の主なる原因は將門の田地を國香等が奪たことにある

ことなし、將門と源扶等の争は將門の妻に對する戀の争であることにしてゐるが、これは主として織田完之氏の説をうけたものであつて未だ研究すべき餘地のあるものと思はれる。更に氏は將門と其の相手であつた貞盛の性格の相違、忠平と將門の關係、實賴師輔と貞盛等の關係、推問東國使任命の顛末等を其銳利なる推理のメスを以て從横に解剖し、坂東占領當時の將門の心中を推測して、一先づ坂東を占領して貞盛を捕へ然る後自首せんとしたのだと言ひ、又、將門はその半生の體驗に依て自家繁榮の要素である生命財産を保全するものは畢竟自己の力其者であつて、藤氏の傳統的威力などの案外効の無い事を確めて居たばかりでなく藤氏の威力其者さへも其根柢が地方の莊園にあつたのであつて實は彼等土豪の支持するに外ならぬことを解してゐたに至つては少しく穿ち過ぎた嫌がないでもない、又將門を有名にした除目や文武百官や偽宮などについては氏は全く茶番狂言であり酒間の狂態であることなし、織田完之氏の説をうけて之を敷衍してゐるものであつて將門辯護に傾き過ぎた憾がある様に思はれる。斯くて氏は最後に、將門の一生は徹頭徹尾私闘を以て終始したものであつて、大叛逆などは甚だしい訛傳である、彼をしてかく私闘に没頭せざるを得ざらしめたのは地方政治混亂の爲であつて、其責は人民たる將門等にのみ負はすべきでない、私闘を公事と混淆して反つて將門を激せしめ對抗的態度に出でしめた主なる原因は明に爲政者たる藤原氏の失態にあるのだ、從來の如く將門一人のみを極悪人として他を問はない取扱ひ方は確に不當な處置である、結局將門は

來るべき武家時代の先驅を爲した意味に於て確に當代の巨人であつたのであると結んでゐる。

第四編に於て氏は疑門の人物とされてゐる秀郷を研究し彼の本據を今の阿蘇郡田沼となし彼と藤原氏の關係は夙に本家領家の關係を結んでゐたこと特に彼が下野守に任ぜられた事を以て歴史の大勢上重大なる意味あることを述べ、一般に信ぜられてゐる將門秀郷會見の傳説は鎌倉武人の具體的理想を示したものであり、又龍宮物語は京人の空想的感情を示すものと爲してゐる、第五編は坂東武者忠常と題して長元の亂の研究を爲してゐる、此編に於て氏は忠常亂は天慶の亂の繼續又は再起であることなし、將門後常陸の平氏と房總の平氏との間に永い間の確執が繼續されてゐたことを述べ、平直方をして忠常の亂を鎮定させ様としたのは丁度仇敵を以て追討使と爲した様なものであるが源賴信が追討使に任ぜられた時は忠常等との間に何か理解があつたに違ひないこと斷せられてゐる。以上の推測が全く事實として認め得べきや否やは別としても此等獨特の見解を立てた氏の觀察が如何に鋭敏であるかを知られるのである。

著者は其自序に於て言はれてゐる如く本書は織田完之氏に負ふ所が多い様であり、又將門辯護に傾いてゐると思はるゝ點もある様である、然し將門と牧場の關係、藤氏と將門との關係、推問東國使任命の顛末等を始めとして我々の啓發さるゝ所が非常に多いのである、總ての歴史がその研究者の主觀を通じて書かれたものである以上それに絶體公平を要求することは無意味のことであり

不可能なことである、氏が少しく將門辯護に傾いたとしても之を攻むるはもとより不當のことでなければならぬ、兎に角、氏の如き特殊な熱心なる研究者に依て將門の眞想が十分に明白にさるゝに至つたことは喜ぶべきことである。

(今宮 新)

お大名の話 (三田村鳶魚著 雄山閣發行)

江戸時代の研究者として知らる鳶魚三田村玄龍氏は震災後「お大名の話」と題する一書を公にせられた。其の「はしがき」に左の如く本書を説明して居る。

あまり難解らしくも思はれて居ない諸侯の生活、一口に大名ぐらしと云つて了つて、説明さへも必要とされて居らぬ、其の大名ぐらし程、今日の世間に間違へられて居るものは尠からうとも考へられる。我等が知つて居る諸侯の世活と、世間で云ひ囃す所とだけでも、大分な差違がある、しかし我等の知つて居る所が精確であるのか、ないのか、或は世間に知れて居る方が間違ひでないのかも知れない。兎に角差違のあるだけは慥だ、さうして其の差違は二三者の書いた脚本について目立つて見へた、そののみならず大方の教を受けた望があるので、今爰に大名に關する記述の一部分を、公刊することにした。其の一部分さいふものが、偶然に奥向即ち家庭の事柄が多く、妻妾との關係を反覆するものであつた、従つて奥方の更年期だとか、避妊だとか云ふことを絮説するものであつた。